

教育研究所だより

宮古島市立教育研究所
指導主事 砂川 睦紀
宮古島市平良字西里1140
Tel 73-1104

第1回学校課題解決に向けた研修会(兼 第2回ミドルリーダー育成講座)

8月25日(木)に行われた研修会後に、講師の堤^{つみ}祥晃^{よしあき}先生と平良善信所長とのちょっとした対談(おしゃべり?)の時間がありました。講話の内容のちょっと奥にある堤先生の考え方など、その部分も先生方にもぜひ紹介したいと思ひ文字起こしてみました。文字ばかり恐縮ですが、授業観を振り返ってみるきっかけになればと思います。

所長 堤先生、今日は本当にありがとうございます。会場からたくさんの質問があったように、先生の講話は校内研や指導方法工夫改善を考える上で視点をたくさん与えて下さりました。宮古島の先生方のお話を聞いて何か感じたことはありますか。



堤先生 そうですね。子どもの姿を見取って研究するっていうのは、結局、**答えは子どもたちの中にある**よって言うことなんです。目の前の子どもがどうだったか?っていう事を見たら、答えは多分そこにあるんです。そうすると、そこに至る方法はなんでもいいやということに気づくんですよ。そこに気づかないと「もうちょっとこうした方がいいんじゃないか」とか「こんなやりかたやったらまずいんじゃないか」と思われるんですね。最終的に子どもたちに知識も考える力も身につけていたら、どんな方法だっていいですよ。逆に最初に説明したからその知識をちゃんと子どもたちが頭の中に残っているかといったら、そんなこと無いかもわからないじゃないですか。それも全部、子どもたちの姿を見たらわかりますよねっていう話なんですよ。で、そこがわかったら、自分なりのいろんな方法を考えつけないですか。でも、そこに至らへんと、やっぱり授業はこうあるべきだとか、これは教えなくていいのかとか、そんな話になってくるんだと思うんです。

所長 プログラム学習みたいにステップアップしていかないと子どもはできないんだという先入観があって、なかなか思い切った授業ができない。そういったところがあるかなと思います。

堤先生 そうですね。探求的な活動をすると結構ジャンプしたりするんですよ。ステップじゃなくて飛び越えてわかったりとか。順番にわかっていくっていうのは、ある程度、学力がある人の考え方だと思います。多分学校の先生はそういう方が多いので、そういうステップアップしていく学び方があってるんだと思うんですよ。けどそれではなかなかうまく学べな

い子もたくさんいるということですよ。なので、**いろんな学び方を保証してあげるというのも大事なのかな**と思います。

所長 先生のご経験から基礎的・基本的事項があまり定着していない子どもが、いきなりジャンプして「こんな風な学びをするんだ」と驚く場面に出会ったことがあると思いますが、そういう例を教えてくださいませんか。

堤先生 そうですね、さっき言わせてもらった国語の先生なんか本当に学力調査の結果を見て「ほー!」って言ってたんですよ。倒置法とか擬人法とか言葉は知らんし、説明もできひん



やけど、でも文書を読み取れたりするんですよ。そして自分なりの意見を書けたりするんですよ。なんかその辺がすごく面白いです。美術でも、本質的なところにポンって気づく子がいるんですよ。私の実践でいうと滑り台を作って、園児たちに遊んでもらうから、園児が遊べるように作るんだよと投げかけるんですよ。そしたら、うまく作れない班とかうまく作れない子っていっぱいいるんですよ。でもそういう子ども達は何も学んでないかというところではなくて、後の振り返り見てると「使う人のことを考えて作るのがすごく難しいし、でもそれが大事なポイントだとわかった」ということを書いてたりとか、別の場面では、みんな相談する中で、いいアイデアが出てきて、自分はいいと思ってても話し合う中で違うっていう意見が出てきたときに、「自分だけの考え方ではだめだな」って気づいた子とかいるんです。デザインの授業なんですけど、デザインの本質はそこなんですよ。うまく作れるかどうかは、なかなか難しいんですけど、デザインっていうのは、自分の、こう、じゃなくって、いろんな条件とか、使う人のこととか、自分以外のところに思いを寄せて、そこに合ったアイデアをいかに出せるかっていうところが一番大事なところなんで、最終的には作る技術がなくてねうまく作れへんような子でも、そこに気づけた子いっぱいいるんですよ。そうすると、その学びはすごく意味が

あったのかなという風に思うんですけど、逆に、あの、いままでの自分の過去の授業で、きちっと作り方を教えてね、こうしたらうまく作れるよって、先生から言われたとおりの滑り台作って、いいのできたねってなったとしても、その本当に大事な部分は実は学んでなかったんじゃないかと思ったりするんです。なので、美術でいうとやっぱりその技術的なこととか、きちっと塗れるとか、きれいに塗れるとかそういうところが基礎としてあるんじゃないかと言われる美術の先生多いんですけども、必ずしもそれがなくっても学びはあるんじゃないかという風に思います。で、それはどの教科でもそうかなと思います。

所長 先生の今おっしゃっているような、授業に対する見方考え方を他の先生方に浸透させていく上で少しご苦労なさった部分があると思うんですけども、どのように克服なさられたんですかね？

堤先生 そうですね、結構その実例を出します。身近なのは、なんかいい感じの先生って、どっか出るんですよね校内研やってたら、その先生の授業を見に行こうっていうツアーを組をみ



ます。ちょっと教務の先生に時間割を工夫してもらって、「〇〇先生の授業ものすごくいいし、ちょっと見に行こう」って誘うんです。で、その見せてもらう先生には事前に打ち合わせして、特にこういうところに気づいて欲しいからここを強調した授業を演出してっていう事もあります。言葉で説明しても通じないことも多いので。

所長 やっぱり百聞は一見にしかずですね。実際に見て感じるものがないと教師は変わらないということなんですかね。

堤先生 私が授業のノウハウとか、そんなことを説明して、じゃあ個人で自分の授業どうなったらいいか考えようっていうよりかは、ビデオにもあったように、5、6人の先生で授業を考えてみようっていう方が学びが深いです。

所長 やっぱりこの教師の共同体制はとても大事なことですね。

堤先生 うまいこと研究が進んでくると職員室の中で授業のことをしゃべるっていうのが増えるんですよ。普段の会話っていうのがすごく大事で、実は昨日、校内研で研修やったんですけど、その後に新採4年目の先生が、今度研究授業するのに指導案を書いてたんですね。でその校内研で私がいろいろ仕組んだ後に職員室に帰ってきて、やっぱり指導案書き直して言い出して、こんな授業じゃあかんって言って、夜残ってやり出したんですね。ほんなら

それに対して、周りの先生が「こんな風にしたらいいんじゃないか」みたいなアドバイスして。夏休みやし、みんな提示で帰りたい雰囲気なんやけどそれでも18時半くらいまでかな、結構その先生に4人くらいの先生がアドバイスしたりとか、という風なことが起こってきたときに、おおすごいな！って思ってたんです。

所長 先生がおっしゃったように、教師も楽しく学びをつくる視点がないと、授業改善に対して意欲がわからないんですね。

堤先生 そうですね、子どもたちが楽しそうに生き生きと活動していたらやっぱりうれしいと思わはる先生がほとんどなんで、そこがもう教師の醍醐味みたいなところがあるじゃないですか、それがやっぱり、学級の行事とか部活とかで味わっては先生が多いんですけど、それが、授業で味わえるんだっていうことがわかったときに、すごいスイッチ入る部分があるんですよ。そこが一番ポイントだと思います。

所長 最後に、これから授業研究とかそういったものを含めてどんな風に展望していきたいのかちょっとお聞かせいただいて終わりたいと思いますけれどもよろしくお願ひします。

堤先生 そうですね、一番思っているのは、応用から基礎を学ぶっていうのが、もっともっと広まらないかなって思うんです。やっぱり基礎をやってから応用っていう考え方がすごく広くて、体育とかでもそうなんですけど、バスケットボールの基本はドリブルだって、わかるんですよ、だから、ドリブルしっかりできるようにしてからゲームをしようねって、わかるんですけど、まずゲームやってみて、とにかくなんかうまいことできへんけど、楽しいな！っていうのがあって、もっとうまくなりたいなって思ったときに、もっとドリブルいけるんじゃないかっていう順番のほうが、絶対いいんですよ。で、そこをいろんな教科の特性とかって拒まれるんですけど、うまいこと踏み越えていって、活動から入るとか、応用から入るみたいな授業がもっともっと定着したら多分子どもたちはすごく学校が楽しくなるし、いい感じの学校が増えていくんじゃないかなと思います。道半ばですけども。

所長 今日は大変ありがとうございました。遠い滋賀県の実践ですけれども、こうやってズームを介して宮古島の職員にもたくさん伝えることができて、今日は幸せな気持ちになっております。本当にありがとうございました。

